紹介

ジュディス・ヘリン　著
（井上浩一　監訳）

『ビザンツ――驚くべき中世帝国――』

ビザンツ帝国―ボスポラス海峡のほとりのコンスタンティノープルを都として古代末期から中世にかけて約千年間にわたって存続し続けた国家の足跡は、現在でも正教会の教会建築や、ヨーロッパ各地の図書館のギリシア語写本などに見ることができる。しかし五百年以上も前に滅び去った、しかも直接の後継国家を持たないこの国を固有の文化・文明を持った有機体としてイメージし、あるいはそこに暮らしていた人々の生活の息遣いを感じることは、現代の私たちにとっては容易なことではない。本書は、古代地中海世界の諸伝統を融合して独自の文化圏を作り上げたビザンツ帝国の歴史の世界に、この帝国に未だ馴染みのない人々を知らず知らずのうちに導いていく魅力あふれる概説書である。また同時に、この一見縁遠い国と現代世界がそれへ投影するイメージとの関わりを捉えなおし、ビザンツ一千年の歴史とは一体何であり、現代の私たちにとっていかなる意義があるのかを積極的に問いかける書ともなっている。

本書は、Judith Herrin, *BYANTIUM: The Life of a Medieval Empire*, Allen Lane, 2007. の邦訳である。「はじめに」によれば、女性史を始めとして多彩な分野で活躍するビザンツ史家である著者に対して、研究室の修理に来た建築作業員が投げかけた「なぜ自分たち向けのビザンツ史の本がないのか」という問いに答えるために書かれた本であるという。それだけにその構成は一般の読者を意識して周到に練られている。まず、本書で扱われるビザンツ帝国に関する様々な主題は、四〇〇ページを超える本文において全二八章の章立てによって時系列上にゆるやかに配置されている。そこにはビザンツ帝国の歴史展開上重要な事件に加えて国制や経済活動、ギリシア古典の継承といったテーマは勿論のこと、宦官と宮廷、正教会の教義論争、法学教育と社会、民衆文学の興隆などこれまでの概説書では十分に触れられることの少なかった内容も網羅されている。その結果狭義のビザンツ国家の興亡史を叙述するにとどまらず、その社会全領域にわたるより広汎な分析によって、ビザンツ帝国を核として生み出された文明の営みの総体を立体的に描き出すことに成功しているといえるだろう。

加えて各章は、ある特定の時代とテーマに特に焦点を当てつつも、決してその中で叙述を完結させることはなく、著者はいささか奔放なまでにその主題の歴史的展開の帰結のみならず、同時代の関連する歴史的事象へも叙述の筆を進めていく。そしてその通時的・共時的連関においてその章で中心的に扱ったテーマのもつ意味が明らかになるように配慮がなされている。そのため単一の章を読むだけでも、扱われた主題の視角からみた、ビザンツ世界の一側面に関するまとまった像が得られるだろう。例えば「ギリシアの火」という章では、この門外不出の兵器のエピソードが、帝国の権威としての軍事技術の問題から九世紀以降の軍の再編成とマケドニア朝時代の軍事的成功、さらには叙事詩「ディゲネス・アクリタス」の背景に存在した東方国境地帯のアラブ・ビザンツ関係の実相にまで連関していく。このような語りの手法のおかげで、

読者はまた各章の主題相互の関係性をも自ずと感得し、ビザンツ世界の全体像を描くことができるだろう。それにゆえに本書は、現在日本でビザンツ史研究の主翼を担う訳者陣による非常にこなれた訳文とあいまって、一般向け書籍としては圧倒的ともいえる情報量にもかかわらず、ビザンツ帝国の歴史に馴染みのない読者にとっても十分通読できるものとなっている。

また著者は、ビザンツ帝国千年の歴史を周辺世界との関わりにおいて明らかにしようと試みるとともに、ビザンツ帝国と現代社会との関わりにも意識を向けている。「ヴェネツィアとフォーク」の章ではイタリア都市国家を始めとする西欧との経済的・文化的摩擦に言及しつつ、現代になおも残存するビザンツ帝国へのネガティヴなイメージの淵源を探っている。加えて終章において著者は現代の教皇ベネディクト十六世によるマヌエル二世（位一三九一―一四二五）の著作の断章取義を批判しつつ、イスラーム勢力との長い対立と交流の歴史から培われた帝国の柔軟な態度を強調することで、ビザンツ帝国をそれに纏わりついたイメージも含めて再考することの必要性を訴えている。

著者が冒頭で述べるように、ビザンツ帝国の歴史を陰謀と柔弱、あるいは絶大な皇帝権と溢れる富、そして劇的なエピソードの連なりに還元することが不可能なのはもはや言うまでもないだろう。「ビザンツ文明を支えていた構造や心性を明らかにし」、またその文明が「他の文明には見られないほど、粘り強くかつ巧みに、伝統や遺産を融合させたことに気付いてほしい」との意図で書かれた本書によって、多くの人がこの活力あふれた文明の全体像に触れることを願いたい。

（A5版　四六九頁　二〇一〇年一〇月　白水社　税別四四〇〇円）

（上柿智生　京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

受贈誌

（二〇一一年三月七日～二〇一一年五月九日）

待兼山論叢　文化動態論篇（大阪大学大学院文学研究科）四四

経済論集（ソウル大学校経済研究所）四九―四

皇學館大學史料編纂所報（皇學館大學史料編纂所）二二九

九州国際大学経営経済論集（九州国際大学経済学会）一七―二

京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊（京都大学人文科学研究所）八

斯道文庫論集（斯道文庫）四五

史學雜誌（史學會（東京大学文学部内））一二〇―二

一橋研究（一橋大学大学院一橋研究編集委員会）三五―四（通巻一六九）

経済論叢別冊　調査と研究（京都大学経済学会）三六

アジア研究所紀要（亜細亜大学アジア研究所）三七

美術研究（東京文化財研究所）四〇二

史學雜誌（史學會（東京大学文学部内））